

第7章 人類の動物性と人間性

今西錦司とベルクソン——二元論をめぐる

今西のもうひとつの誤解

ここで、動物から離れて人間に目を転ずることにする。まず、先にふれた、二元論をめぐる今西とベルクソンの立場の違いをもう少し細かく見ておくことにしたい。そこには、二元論やベルクソンに対する今西の抵抗が感じられるからである。また、その検討を進める中で、今西がベルクソンを誤解していた理由も、おのずと明らかになるであろう。

理論生物学者であり、今西とも親交のあった飯島衛（1912-1985年）を師とする、今西と同じく京都大学農学部出身の生態学者、丹羽文夫（1941年-）は、自著の中で、今西とベルクソンの相違点と類似点を、次のように説明している。

ベルクソンと今西はともに生物の主体性に最大のポイントをおく点で共通しているとはいえ、一方が生物と環境という二元論にたちながら環境を一方的に捨象することによって生物主体に重点をおくのに対し、他方は生物と環境を一元的に捉えることにより、環境をも生物主体の射程内に組み込んでいるのである。そのため生物現象や生物進化を説明するにも、ベルクソンはエラン・ヴァイタルなる形而上学的概念を生命に内在する根源的衝力として措定せざるを得なかったが、これに反して今西はあくまで自然における具体的な生物そのもののの中にそれらの原因を捜し求めていったといえる。（丹羽、1993年、229ページ）

この指摘が正しいかどうかはともかくとして、二元論者であるベルクソン

に対して、今西が、生物に主体性を認めながら、「環境をも生物主体の射程内に組み込」むことで、二元論に陥るのを回避しようとしていたことがわかる。その今西は、二元論が誕生するに至った経緯ないし理由を、次のように推測している。

たとえば魚は、生きていれば、泳いだり餌をとったりするが、死んだ魚はそうではない。とはいえ、死んだ後でも、身体的には魚である。そのことから、死物としての身体に宿った何ものかが、その身体を生かし、動かしていると昔から考えられてきた。

その何ものかが生命と呼ばれようと、或ひは精霊と呼ばれようと、それは要するに大した問題ではなかつたのである。私はここでこんな愚かしい二元論に今さら深く立ち入る必要を認めないが、こうした考へ方においても、生きてゐるといふことと生命があるといふことが同意義に解されてゐるといふ点だけをとつて考へるならば、それは必ずしも二元論といふことにはならないと思ふ。ただ生命をさへ、これを一種のものとしてでなくては其の存在を考へることが出来なかつたといふところに、二元論の幼稚さもまたその誤謬もあつたのであつて、これからひいては肉體は假りの物、或ひは肉體は滅びるが靈魂は不滅であるなどといったやうな考へも、導き出されるようになったものであらう。

しかし生きた生物をはなれて生物の身體なり構造なりの存在が考へられぬ以上、そしてまた生物の身體なり構造なりがもと一個の細胞から生成發展したものであることがわかつた以上、かくのごとき二元論の成立し得る餘地は最早寸毫といへども残されてゐないのである。(今西、1941年、31-32 ページ。傍点＝引用者)

“魑魅魍魎”の存在すら認めていたふしのある今西にしては、この発言はどのようなのであろうか。もちろん今西が言いたかつたのは、生きている生物自体に自らを生かす主体が本来的に内在しているので、死物に魂が宿るという飛躍的な通俗的着想はまちがっているということなのであろうが、その根底には、やはり二元論そのものの否定がある。さすがの今西にしても、バルク

ソンの言うように、「精神の機械論的本能」は、やはり強力だったということなのかもしれない。

西洋キリスト教世界に生まれた科学は、特に精密科学と呼ばれるようになって以降は、そうした無意識の意志に忠実に従って、靈魂や肉体とは別個に存在する心のようなものを排除したところに、換言すれば、科学的方法で確認されているわけではない偶然説という基盤の上に、主として経験的に得られた科学知識を積み重ねて現在に至っている。その意味では、現行の科学知識体系は砂上の楼閣と言わざるをえない。また、それまで経験的な側面から、科学的研究の対象とされていた、たとえば妊婦刻印^[註1]などの現象は、新たに得られた科学知識で説明できないことが判明すると、“迷信”として排除されるということをくり返してきたのである。

主流科学者たちは、そのような自らの態度を“合理的”と独断的に称しているにすぎないにもかかわらず、その態度を“科学的”と僭称してきた。そこに靈魂や肉体から独立した心が入る余地は、最初から用意されていないのである。したがって、「かくのごとき二元論の成立し得る餘地は最早寸毫といへども残されてゐない」のではなく、最初から排除されていたし、その傾向は、最近になるにつれてますます強まってきたと言わなければならない。

すなわち、生きた生物を離れては身体や構造が考えられないとしても、それが一個の細胞から生成発展したものであることが明らかになったとしても、そこに心のようなものが関与していないことが証明されない限り、この

[註1] 19世紀末頃までの欧米の医学書や医学雑誌には、妊婦刻印 *maternal impressions* という現象に関する記事や論文が、かなり肯定的な形で掲載されていた（たとえば、Fisher, 1870; Gould & Pyle, 1900, pp. 81-85; Murdock, 1888）。一流医学雑誌である *British Medical Journal* 一誌だけでも相当数の論文が掲載されている。これは、妊娠中の女性が、奇形をもつ人物を見て驚愕したり不安を覚えたりすると、それと同じ奇形をもつ子どもが生まれてくるという、世界各地で言い伝えられてきた現象である。この現象の存在が現代医学の中で否定されたのは、獲得形質の遺伝を否定したアウグスト・ヴァイスマンが、1885年に、身体各部分と生殖細胞の間につながりは認められないという、生殖質独立説（Weismann, 1893, p. xiii）を唱えたことなどから、その説明がつかなくなったためであって、それ以上の理由によるものではない。ちなみに今西は、むしろこの学説には反対意見をもっていた（今西, 1967年, 40ページ）。

論理は成立しない。逆に、靈魂や心のようなものがそこに関与していることになれば、現行の科学知識体系は、その基盤に致命的な欠陥を内包していることになるため、小手先の修正は不可能で、土台から作り直さざるをえなくなるのである。

今西は、この引用文の中で、二元論が登場した理由を観念的なレベルのものと考えている。場合によってはそのような側面もあったのかもしれないが、ベルクソンや超常現象研究者が考える二元論は、ほとんどが経験的なものである。テレパシーや念力のような超常的現象や、死後存続の裏づけになりそうな現象の報告が、質量ともに無視できないほど存在したことが、そうした俗説が生まれた原因であったとしても、その一方で19世紀末に科学的研究が始められた理由でもあった。話がさらに逸れるようであるが、本章での検討をさらに進めるため、ここでその点について少々説明しておかなければならない。

超常現象研究の一環としての死後存続研究

先述のように、ケンブリッジ大学の研究者を中心として、1882年に心靈研究協会がロンドンに創設されたわけであるが、その会員たちの大多数は、今西が「愚かしい」として一蹴した二元論を共有していた。その中には、ベルクソンのみならず、生物学方面ではダーウィンとともに自然選択説を唱えたアルフレッド・ラッセル・ウォーレスやハンス・ドリーシュが、生理学方面ではシャルル・リシェが、心理学方面ではウィリアム・ジェームズやウィリアム・マクドゥーガルが、物理学方面ではウィリアム・クルックスやウィリアム・バレットがいた。ちなみに、ジークムント・フロイトは、1911年に名誉会員に、カール・ユングは1917年に会員になっている。わが国では、京都帝国大学精神科初代教授であった今村新吉が、やはり1911年に準会員として入会している(Anonymous, 1911, p. 82)。当時は、そうした超一流の科学者や哲学者たちが、“ことの重大性”は現在ほど判然としていなかったとはいえ、それぞれの立場から超常現象と真剣にとり組んでいたのである。

当時の研究者たちの少なからずは、今から見ると信じがたいことではあるが、超常現象は遠からず証明されるものと考えていたふしがあり、そのため、

かなり楽観的な態度をとっていた。^{〔註2〕}ところが、心霊研究協会の創設から130年以上が経過した現在では、そのような考えかたを示す研究者は、おそらくひとりも存在しない。現在から見れば、当時の研究者たちは、いわばたかをくくって見ていたということであり、時間が経ってみなければ決してわからなかった、これ自体がきわめて重要な所見なのである。

Proceedings of the Society for Psychical Research (『心霊研究協会会報』)の創刊号(1882年刊)の巻頭に掲載された設立趣意書によれば、ダーウィンが死去する2ヵ月前の1882年2月20日にロンドンに創設された心霊研究協会の当初の目的は、次のようなものであった。

各国の著名な科学人によって最近行なわれた観察をはじめ、過去および現在の、信頼の置ける数多くの証人たちによる、記録に残された証言を見ると、多くの錯覚や欺瞞に混じって、注目すべき現象がかなり存在するように思われる。こうした現象は、一般に承認されている仮説によつては、一見したところでは説明できないし、もしそれが争う余地のないほど証明されたとすれば、このうえなく大きな意味を持つことになるであろう。〔中略〕

当協会の目的は、このような種々の問題を、何らの先入見や偏見にとらわれることなく、かつては同様に原因不明であり熱心に議論もされてきた数多の問題をこれまで科学に解決させえたのと同様の、正確にして冷静な探求精神を以て研究することである。当協会の創設者は、この方面の研究にまつわる例外的困難を十分認識しているが、にもかかわらず、一貫した辛抱強い努力を重ねることにより、永続的重要性を持つ結果がある程度得られるのではないかと期待している。(心霊研究協会、1993年、17-19ページ)

〔註2〕たとえば、ウォーレスは、1874年に次のように述べている。「私にいわせればもはやこれ以上心霊現象を追試する必要はない。殊に心霊実験は手品ではないか、まやかしではないかといった疑惑のうえに立った調査はもう時代遅れである」(ウォーレス、1985年、226ページ)。ところが、それから140年以上を経た現在でも、否定論者との間では当時とほとんど同じ状況が続いているのである。

そして、その研究対象として、テレパシー、催眠、ライヘンバッハ現象^{〔註3〕}、死後存続に関係する種々の現象、巨視的念力（マクロPK）の5分野を掲げている。このうち、催眠とライヘンバッハ現象は、後に別の領域に移されるか否定されるかして、その対象から外されることになる。残る3領域は、現在の超常現象研究にそのまま受け継がれており、そのうちでも、とりわけ「死後存続に関係する種々の現象」が、当該の問題に大きくかかわってくるのである。

しかしながら、テレパシー（ESP）にしても念力にしても、心自体がもつ能力と考えざるをえないので、そうした能力の実在が明らかになれば、心が脳とは別個に存在することを想定せざるをえない。さらには、死後存続という現象が実在することになれば、テレパシーや念力どころではなく、心が脳とは独立して存在することが、否定の余地なく明らかになる。

ところで、ある現象が死後存続の裏づけになることを明らかにするためには、まず、それが通常の原因によるものであることを、事実に基づいて否定したうえで、テレパシーや念力によっても説明できないことを証明する必要がある。そこが死後存続研究の難しいところであり、当初この問題に強い関心を寄せていたジョゼフ・ラインを悩ませた難問でもあった。ラインは、死後存続の研究に最後まで着手できないまま、その手前にあるサイ（ESPと念力）の研究に終始する結果になったのである。

幻影に救われた女性

サイと死後存続という現象が、超常現象研究の中でどのように位置づけられているかを説明するには、ベルクソンが『道德と宗教の二源泉』（第二章）に引用している事例が最適かもしれない。この事例は、心理的意識と無意識的行動との関係を考察するための糸口にもなるであろう。それは、次のようなものである。

〔註3〕ドイツの物理学者、ハンス・ライヘンバッハが唱えた、人体や水晶などから発せられる光エネルギーによって生ずるとされる現象のこと。

ホテルの上階にいたある女性が、下に降りようとして、エレベーターの前行くと、たまたま扉が開いていた。エレベーターが来ているものと思い、急いで乗ろうとした瞬間、いきなり後方へ突き飛ばされた。エレベーターの運転係が突如として姿を現わし、女性を廊下へ押し戻したのである。女性は、その時点で我に返った。驚いたことに、そこには運転係の姿がなかったばかりか、そもそもエレベーターのかご自体が来ていなかったのである。かごは下の階にあったにもかかわらず、機械が故障していたため、その階の扉が誤って開いてしまっていたのであった。危ういところであったが、幻影のおかげで難を免れることができたのである(ベルクソン, 1965年b, 142-143ページ; Myers, 1892, pp. 345-46; 1903, vol. 2, p. 111)。ベルクソンは、この事例を次のように説明する。

言うまでもなく、この奇跡は容易に説明できる。この女性は、文字通りの事実に基づいて正確に判断を下していた。実際に扉が開いていたので、エレベーターはその階に来ていたはずであった。エレベーターが来ていないのをひと目でも見ていれば、その判断のまちがいがわかったのであろうが、それではまにあわなかったのであろう。正確な判断に沿った行動は、既に始まっていた。理性的な人格の下層にある、本能的すなわち夢遊症的な自己が行動を起こしたのは、まさにその時だったのである。危険に気づいた瞬間に、行動を起こす必要があった。その自己は、自分の体を後方へ投げ飛ばすと同時に、架空の幻覚的知覚を誘発させた。明らかに理屈に合わない動きも、まさにその幻像によって引き起こされたことになり、その説明となったのである。(Bergson, 1935, pp. 99-100)

本例を検討する際に大きな問題になるのは、この女性がどこまで歩を進めていたか、つまり、片足を空中に踏み出すところまで行っていたかどうかという点である。もしそこまで歩を進めていたとすれば、通常の力で自分の体を引き戻すことはもはやできないので、念力的な力が働いたことをどうしても想定しなければならない。この記述だけでははっきりしないが、慎重を期して、とりあえずは、そこまで行っていなかったものとして話を進めること